

2020年9月13日 礼拝説教要旨

詩編講解説教30「泣きながら夜を過ごしても」

詩編30：2～6、ルカ22：31～34

第30編は重い病気を癒された人の感謝の歌とされています。「わたしの魂を陰府から引き上げ、墓穴に下ることを免れさせ、わたしに命を得させてくださいました」（4節）このような表現が根拠になっていると思われませんが、「墓穴」と訳された言葉はただの「穴」という意味の言葉です。わたしたちは、しばしば人生の中で病を得る経験をしますが、それは時に深い穴に落ち込むような心境になるのかもしれないかもしれません。特に死を覚悟しなければならぬ病があります。若くして、また志半ばで病を得た時は、人生に絶望し、立ち上がることができないほどに打ちのめされてしまう。でもそれは病気に打ちのめされているということなのでしょう。

この詩人は、病というものをもっと深いところで見つめています。4節に「陰府」とあります。陰府（シェオール）というのは、詩編にしばしば出てくる言葉ですが、第6編6節に次のようにあります。「死の国へ行けば、だれもあなたの名を唱えず、陰府に入れば、だれもあなたに感謝をささげません」つまり陰府とは、神さまの御名を呼ぶことも、神さまに感謝をささげることもない。神さまと完全に切り離された世界ということです。病の怖さというのは、病そのものの怖さというよりも、そのことによって神さまが見えなくなること。神さまに祈れなくなること。そこに病の本当の怖さがあります。

わたしは牧師として教会員が入院した場合は努めて病院を訪ねるようにしています。ただコロナ禍の今はこれがとても難しくなっています。そのことは今おそらくすべての牧師が直面している一つの大きな課題です。人は体を病むと心も弱くなっていきます。その中で多くの場合、実は祈ることができない状況になるのです。一人では祈ることができない。だから誰かが祈りを助けてあげなくてはなりません。もし家族が信仰をお持ちならば、ぜひ一緒に祈っていただきたい。病の本当の怖さは祈ることができなくなることです。病ゆえに神さまの救いを見失ってしまうことです。そこに病に潜む陰府の力、罪の力があります。「敵」（2節）であるサタンは病を用いてわたしたちを神さまから引き離そうとしています。

けれども、そこにも神さまの救いは及びます。たとえわたしたちがこの陰府に陥ってしまったとしても、わたしたちには救いがある。わたしたちに先立ってこの陰府に降られ、そして陰府からわたしたちを引き上げてくださる主イエス・キリストがおられるのです。キリストはあの十字架で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。宗教改革者たちは、そこに陰府があると言います。あの十字架の上に、神さまから見捨てられるという、完全に神さまと切り離された場所がある。でもそこにキリストは降られました。それは病ゆえに陰府に陥ってしまうわたしたちをそこで受け止めてくださるためです。

そしてそれだけではありません。三日目にキリストはよみがえられました。わたしたちの魂を陰府から引き上げてくださるために、キリストはよみがえられたのです。キリストがこの陰府の力と戦い、これに勝利してくださった。このところには「引き上げる」という言葉が繰り返されます（2、4節）。キリストのよみがえりは陰府からの「引き上げ」です。キリストの十字架とよみがえりの出来事こそ、この詩編が待ちわびている本当の救いなのです。

そしてそのことが6節のところに記されています。「泣きながら夜を過ごす人にも喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる」印象的な言葉ですが、涙の夜と喜びの朝、この飛躍こそ、十字架とよみがえりの御業を表しています。さらに「ひととき、お怒りになっても、命を得させることを御旨としてくださる」神さまの怒りはひととき、一瞬なのです。つまり怒りが神さまの目的ではない。この夜の闇が、死が、病の苦しみが最後のことではない。神さまはわたしたちが滅びることを望んでおられません。「命を得させることを御旨としてくださる」のです。どのような人生であっても、病の連続でも、主はわたしの人生を贖い、御旨にかなうように導いてくださる。だからこそイエス・キリストを与え、罪の赦しと永遠の命を得させてくださった。その御旨の中でわたしたちは自分の命を捉え直すことができるのです。

この歌は重い病を癒された人の感謝の歌ということを目頭申しました。しかしそれだけではありません。「主の慈しみに生きる人々」(5節) この歌の背後には共同体の存在があります。1節の表題を見ますと「神殿奉獻の歌」とあります。幾つかの注解書は、これは内容と一致しないから別の表題が紛れ込んだとしています。しかしわたしはそうは思いません。「神殿奉獻」とは、例えばエズラ、ネヘミヤで見られるような捕囚から帰還して神殿を再建する際に用いられる言葉です。また「奉獻」(ハヌカー)は異教徒から神殿を取り戻し、再奉獻したことを記念する祭に由来する言葉だと言われます。つまりこの歌の背後には共同体の回復があります。個人は絶望して神さまに祈れなくても、共同体は神殿を取り戻し神さまを礼拝している。ここが重要なのです。この共同体の祈りに支えられて、個人の祈りが起こされる。それが陰府の穴から引き上げられる道なのです。この共同体こそ教会を指しているのは言うまでもありません。

時に病の中で祈れなくなることがあります。人生の中では泣きながら夜を過ごす日々があるのです。でもわたしたちが神さまを礼拝する。礼拝の中でとりなしを祈る。それが陰府の穴からわたしたちを引き上げるのです。福音書に主イエスがペトロの三度の離反を予告するところがあります。でもその時に主は言われます。「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ22:32)これが教会のとりなしです。この共同体の祈りがわたしたち一人一人の救いになるのです。そのことを信じて礼拝を続けましょう。